

発行所 (郵便番号100)  
東京都千代田区丸の内2-4-1  
丸の内ビルディング781号室  
社団法人スウェーデン社会研究所  
Tel (212) 4007・1447  
編集責任者 高須 裕 三  
印刷所 関東図書株式会社  
定価200円(年間購読料参千円)  
1978年2月25日発行  
第10巻 第2号  
(毎月1回25日発行)  
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.10 No.2

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

## 経済危機に処する福祉国家スウェーデン

Sweden, managing to be a Welfare  
State in the Economic Crisis.

日本大学教授 高須 裕 三  
Prof. Yuzo Takasu

1970年代の(とくにその後半の)経済危機が工業先進諸国に与えつつある打撃の深刻さは、スウェーデンにおいても、もとより例外ではない。

ウプサラ大学のRagnar Bentzel教授は、著名な経済学者であるが、2月22日のダーゲンス・ニーヘーター紙は、同教授によるスウェーデン経済の今後5年間におけるきわめて悲観的な見通しを紹介している。すなわち国民の消費は今よりふえることはなく、この経済問題はまた一連の重大な社会問題を誘発するであろう。実質的賃金の増加は起こりえず、賃金交渉は諸集団間の再配分をなすにすぎない。それゆえ集団によっては今より所得が低下しよう。すでに勤労者と退職者、農業者と非農業者との間には対立関係が見られるが、集団的利害対立は今後一層増大するものとBentzel教授は断言している。

同教授は、今後5年間の同国経済の展開の幾つかのコースを予想した上で、その何れの場合でも、私的消費は停滞か減少の結論に達するという。(ちなみに過去数十年間、私的消費の増加率は年平均3.5%であった。)スウェーデンが国民所得の統計を始めたのは1891年であったが、それ以来、5~6年間も継続する不況の長期化は今回が初めてである。果して同教授の予測通りになるならば、それはスウェーデン経済の構造的破産を意味することになるとBentzel教授はいう。そしてさらに今後の老齢年金制維持のためには、退職年齢を再び引上げざるをえまい、との考えも打出

されている。

舞台は変って1月27日、スイスのDavosで1週間にわたり開かれた経営セミナーで、ヨーロッパ各国から参集したビジネス界の代表者たち500人を前にして、「スウェーデン使用者連盟」の会長Curt Nicolin氏は、一種の「福祉見直し論」を述べ、勤労がもっと刺戟されるようにこの国の福祉制度は改変されるべきだ、現在の制度では、働く者と働かない者との所得の差は概算して一日11.75クローナ(今日の邦貨換算、約623円)に過ぎない、これでは勤労意欲の減退は必至、と論じた。

Nicolin氏は、失業防止のために新規に教育訓練中の離職者に支払われている一日25クローナ(邦貨換算約1,325円)の「訓練手当」実施に際し、必要な経過的調整措置が欠けていたと政府を批判し、また有給休暇5週間制にも不満を示した。

さらに同氏は、日本を例に引き、日本には生産意欲も勤労意欲もあり、また労使協同の必要性に対するよき理解が醸成しているとして、ヨーロッ

### 目 次

経済危機に処する福祉国家スウェーデン	高須 裕 三… 1
スウェーデン王立図書館	三浦永年氏… 2
最近のスウェーデン経済社会ニュース	4

パ人は日本に学ぶべき点が多い、と説いた（1月28日ダーゲンス・ニーヘーター紙）。

もとより Nicolin 氏は、福祉水準の向上そのものに反対するのではなく、働く者と働かない者との差を処理するのに、経過的調節の安全弁があって然るべきだ、というのである。

ヨーロッパ人が自己反省して、個別性の智慧を日本に求め、日本例も自己反省して、西・北欧システムの社会性に更に学ぶ。その両者交流を促進する契機は、皮肉にも1970年代後半の経済危機であるものの如くである。

## スウェーデン王立図書館

The Royal Library

— 世界の図書館 (17) —

三浦永年氏

Mr. Einen Miura

本稿は、著者ならびに出版社の丸善株式会社の諒解をえて「学鏡」第75巻第3号より転載したものであります。

スウェーデンの王立図書館の正式名は「KUNGL. BIBLIOTEKET」といい、これは文部省の直接管轄下にある国立図書館で、現在、ストックホルム市の中心地にあるホームレゴーデン (HUMLEGÅRDEN) という公園の中に建っている。

この図書館の始まりは16世紀中葉、王宮内の書庫に並べられた国王エリック14世の私蔵本だけであった。しかし、1576年、王立図書館はエリック14世や政治家などのコレクションをある修道院のペーダーゴーギウム・テオロギウム (PAEDAGOGIUM THEOLOGICUM) という教育学と神学研究所に預けた。そして、1590年に「緑の廊下」と呼ばれる長さ90メートル、幅3メートルの王宮の北側の所にヨハン3世のコレクションと研究所から戻ったコレクションの一部を加えた。それから、グスタフ2世アドルフは1620年、研究所にあった残りのコレクションをウプサラ大学の創立にあたって寄贈した。

1648年の火事で書籍の一部を焼いたが、「緑の廊下」とは別の館の多くの部屋を書庫とした。そして、次第に所蔵する書籍の数も増えていった。特に、1618年から48年までの「30年戦争」の時、プラハやヨーロッパの各地から多量の書籍を購入して、17世紀中葉までには図書館としての大きな機能を持つようになった。1661年には再び書庫は東北館の塔のある部屋に移された。その年に国内で印刷される全ての書類文献を保存する義務を持ち、他の教育文化機関と連携して学術研究資料を

確保するようになった。

ところが、1697年の大火で図書館を含め王宮の大部分を焼失してしまった。幸い、猛火から持ち出された僅かの貴重な書籍は王宮からアクセル・リルイエ伯爵家の一室に置かれたが、それ以降、長い間、1カ所に所蔵されることなく、1714年、貴族の1人ブォンデスカ・パラツェット家に移されたが、ストックホルム市当局がこの家を市庁舎として購入することを決めたため、書籍は別の貴族ペア・ブラヘス家に1730年移されたが、所蔵された部屋は古く、暖房設備がないため、長く厳しい冬の北欧での保存状態は非常に悪かった。大火のあとすぐに、ヘードヴィック・エレノラ女王は新王宮の設計にあたって、王宮の北館に図書館をめぐめを設置するように指示した。その後、王宮の建設ぐって、設計の変更や工事の中止などによって、初めの計画よりだいぶ遅れ、新王宮が完成したのは1768年であった。したがって、書籍が保管されていたペア・ブラヘス家からようやく王宮内の書庫に移されたのは、あの大火から約70年後であった。

それから約90年後、その場所は再び小さ過ぎるようになったので、書籍の一部がブラズイホルゲンメンにあるフィスカルゴンゲン館に1856年移された。その後、1865年に国立博物館の完成によって、そこに陳列される絵画、彫刻、工芸品、甲冑、貨幣、出土品などが王宮を初め、各地から出展された。しかし、書籍は独立すべきものとして、王宮

図書館の館長クレミングや建築家のハラルド・ヴィーゼルグレンなどはそれに加わらなかった。そして、王宮の空いた部屋にフィスカルゴンゲン館から保管されていた書籍が運ばれた。

さて、18世紀中葉から起った産業革命によって、本の生産も印刷及び製紙機械の改良と技術向上によって急速に伸びていった。しかも、それは19世紀に入ってますます多量に生産されるようになった。当然ながら、王宮の図書館は小さくなったため、各研究団体や学者などの要望のもとに、国王は王宮外に新しく土地を求め、文化的あるいは学術的な書籍の保存と研究を目的として、新王立図書館の建設を決めた。しかし、建設にあたって、設計者の交換、物価の値上り、建設費の削減などの問題が持ち上がり、運営はあまりうまくいかなかった。最終的には建築家ダールの指導のもとに工事が進行された。そして、1871年7月に着工した王立図書館の建設は、6年半の年月を経て、ようやく、1878年1月に完成した。これが現在の建物である。当時、ガス燈が使われていたため、常に火災の危険があったが、電燈に交換されたのは1892年で、それから次第に館内の設備が整うようになった。

完成当時、図書館は蔵書収録20万冊の設計で建設されたが、将来の蔵書の増加を予測した場合、十分な収容能力を持った建物ではなかったため、1918年、国王の指示に従って建築家アクセル・アンダースベルグは図書館に平行して新館を建て、旧館と新館を結ぶ廊下を設計した。しかし、1940年以降、館内は再び狭くなり過ぎ、1952年、ウノ・ヴィラス館長が建設省を新しい図書館の建設について話し合ったが、もとの場所に留まるべきものとして、1957年に、読書閲覧室、研究室、図書館員の部屋、書庫などが地階に二倍の大きさに拡張されたが、それでも十分な広さではなかった。現在、王立図書館に新館を増築すべきか、あるいは、別の場所に大規模な王立図書館を新築するかという計画について論議がなされている。

王立図書館がある公園は16世紀に貴族の菜園として使われ、17世紀には王室や貴族の遊園地として使われた。現在、市民の憩いの場として開放されている。また公園内に、スウェーデンが世界に誇る植物学者リンネの像が図書館を見守るように立っている。図書館は長方形の建物で、淡黄色の

壁に白灰色の線で縁どりされた美しいすがたをしており、蔵書数は一般図書約100万冊、マニユスクリプト1万4千点などを初め、エッチング・リトグラフ、新聞、写真、論文、パンフレットなど多数を所蔵している。特にコレクションしているのは、マニユスクリプト、インキュナブラ、稀観本、古地図はもちろんのこと、紋章学、装飾学、フランス舞台劇、イタリア歌劇、動物などがある。その中に、エリック14世、ヨハン3世、グスタフ3世、ダスタフ4世、アドルフ、カール3世やその他の国王のコレクションがある。また、王立図書館が世界に誇る本「悪魔の聖書」(GIGAS LIBRORUM)がある。これは1204年から30年にボヘミアで作られたもので、160頭のロバのスキン、いわゆる618ページに及ぶパーチメントを使った中世ヨーロッパ最大のマニユスクリプトとしてあまりにも有名である。また、西暦750年頃に記述されたラテン語のゴスペル、非常に珍しい古いアイスランド語のマニユスクリプト、トルデンショール氏による日本文献コレクション、ステイエルン氏のゲーテやワグナー文献コレクション、バーグマン氏の紋章学文献コレクション、エルゼヴィア・プレス本のコレクションなど歴史的、文化的に価値がある書籍を相当数見ることができ

る。私は1972年、73年、75年、77年と4度ほどこの図書館を訪れる機会があった。それは、造本装幀芸術に関する書籍に興味を持っていたからである。そこでは、ジャン・グロリエが所蔵した4冊の本、ルネッサンス期に活躍した有名人のために制作されたコーデックス、マニユスクリプト、インキュナブラを初め、バロック期におけるローマンスタイルの装幀本、イギリスのロジャー・パートレットの装幀本、アルバート・マグナスのエルゼヴィア・プレスの装幀本、フランスのフロリモ・パディエの装幀本、ドイツのゴールド・レザースタイルの装幀本、ロココ期におけるフランスのパデルー、ドロム、ドサーなどの装幀本やロマン主義期のトラウツ、スマイエ、トーベナーなどの装幀本を見ることができ、それらが非常に素晴らしく、完全なものであることを知ることができた。造本装幀に用いる真鍮のスタンプ、パレット、ルーレットなどが時代ごとにガラス戸棚に並べられて、保存されているのは見事である。

また、王立図書館の建物総面積は約6,500平方

メートルで、貸出し室、写真再生室、カタログ室、陳列室、新聞及び雑誌室、読書室、研究室、科学者及び筆記室、食堂、クローク室、製本及び修理室、マニユスクリプト室、地図及びプリント室などに分かれている。また、図書館の機能上、重要な書籍の管理組織は、スウェーデン文献資料部、新収図書部、書誌部、カタログ部、製本修理部などに分かれている。また、王立図書館の発行物はスウェーデンのいろいろな図書に収録されている全ての書籍を網羅した年鑑「ACCESSIONS-KATALOG」を初め、「SVENSK BOKFÖRTECKNING」(スウェーデン書誌学)、「DOCUMENTATION OCK DATA」(記録文書と資料)などがあり、内外の各機関と情報の交換業務を行っている。

図書館を利用する外国人は、パスポートなどの身分証明書を提示しなければならない。その時、大学、研究所あるいは大使館などからの推薦状を持参すると、手続が簡単で、研究対象となるいかなる書籍文献をも閲覧することができるようになっている。正面の入口から入ってすぐ左側に受付

があり、そこで書類手続を行うが図書館員はたいいてい母国語のほか、英語、ドイツ語、フランス語などを話すので不自由なく閲覧することができる。

最後に、図書館の利用時間を記述すると次のようになっている。

(一)、一般図書閲覧時間は月曜日から土曜日までの8時45分から22時まで(但し、金・土曜日は18時まで)、日曜日は11時半から17時まで、(二)、貸出し及び返却時間、月曜日から土曜日までの9時半から18時まで(但し、土曜日は14時まで)、日曜日は休み、(三)、マニユスクリプトの閲覧時間は月曜日から土曜日までの8時45分から17時まで(但し、土曜日は13時まで)、日曜日は休み、(四)、古地図・エッチングなどの閲覧時間は月曜日から土曜日までの8時45分から12時までと13時から18時15分まで、日曜日は休み、(五)、複写再生の利用時間は、月曜日から金曜日までの9時半から18時まで、土・日曜日は休み、(六)、受付時間は月曜日から土曜日までの9時から17時半まで、(但し、土曜日は15時まで)、日曜日は休みである。

(装幀芸術家)

## 最近のスウェーデン経済・社会ニュース

### 今後5年間におけるスウェーデンの工業生産、年間3%上昇する見込み

産業省が、秋におこなった報告書によると、スウェーデンの工業生産は、1976年から1982年にかけて、年間3%の上昇が見込まれ、1970年代上半期より、幾分安定するものと思われる。一方、就業時間は、年間2.3%減少すると思われる。

この成長は、以前の1970年代に比べて、生産性が、年5.3%という比較的高い成長率を意味する。週平均就業時間が年に0.8%短縮するに際して、1976年から1982年における工業雇用者数は約85,000人減少すると思われる。

同省の見通しによれば、1977年から1982年における年間平均工業投資は、1976年の投資水準を13%下回るものと思われる。

全数値は、さまざまな工業分野において、かなりの相違を含むことが重視される。年間成長率4%以上が期待されるのは、製材、化学、ゴム及び

プラスチック、電気機械、機械工業で、一方消費財の分野では、水準以下の成長率が見込まれている。大幅な生産削減が造船部門で予想されている。

同省は、1976年秋におこなわれた見通しに照らして、1977年度の投映は、工業生産及び雇用の両者の下降傾向を示していると発表した。

### 緊縮の国家予算、依然として赤字を示す。雇用、社会福祉、エネルギー節約、相変わらず優先

スウェーデン非社会主義連立内閣によって1月10日に国会に提出された1978/79財政年度の予算案において、雇用維持、経済の均衡是正、エネルギー節約、老人及び子供のいる家族に対する保障の拡大を目指す努力が優先問題として挙げられた。歳出方面に緊縮が目立つにもかかわらず、予算は322億クローナ(\$6,700,000,000) (邦価約1兆6,000億円)の赤字、あるいは現在見積られている1977/78財政年度とほぼ同額の赤字を示している。

1978/79財政年度の歳入は1,194億クローナ(5兆9,700億円)と見積られているが、これは現財政年度に関して予知されたものを7%上回っている。政府は今年度5月1日からのガソリン税をリットルあたり0.25クローナ(12.5円)値上げすることを提案しているが、これは小売価格を1/7引き上げると同時にヨーロッパ諸国の大部分において最低価格のガソリン税を維持するものである。定価あたり100クローナ(5,000円)の新税は航空機運輸に予定されている。

1978/79財政年度の歳入総額のうち、所得と資本に対する税金・社会保険料その他が41%を占めると見積られ、付加価値税26%、関税13%、自動車税5%、ガソリン税3%、その他の財源から12%と見積られている。

歳出は1,516億クローナ(7兆5,800億円)で、昨年提出された1977/78年度予算の18%増であるが、現在予想されている現財政年度の実数値をわずかに7%上回っている。

歳出総額のほぼ1/5、280億8,000万クローナ(1兆4,040億円)が社会保証(基本年金・健康サービスなど)に当てられる。196億2,000万クローナ(9,810億円)が教育及び研究費に、147億3,000万クローナ(7,365億円)が国防費に当てられる。家族手当に93億9,000万クローナ(4,695億円)労働市場及び地方政策に80億3,000万クローナ(4,015億円)、報道に78億8,000万クローナ(3,490億円)、住宅助成金その他に77億1,000万クローナ(3,855億円)、産業諸政策に69億8,000万クローナ(3,490億円)がそれぞれ当てられる。

国債の利子支払いは総額96億(4,800億円)に上るが、これは現財政年度の50%増である。

国際的な開発協力への割当は総額38億7,000万クローナ(1,935億円)でGNPの丁度1%強である。そのうち1/3は国際的な諸機構を通して運ばれるが、各国向けの援助のうち98%は寄贈の形をとっている。

### 植物学者リネーの200年祭

“今日のリネー(Linné)における研究—発展と展望”を主題にした国際シンポジウムは、1778年1月10日に没したスウェーデンの植物学者カール・フォン・リネー(Carl von Linné)の死後200年祭を表明して今年開催される式典の中で、最も貴重な位置を占めるものの一つであろう。

同シンポジウムはウップサーラ(Uppsala)大学とスウェーデンリネー協会(Swedish Linné Society)、王立科学アカデミー(Royal Swedish Academy of Sciences)の協同主催のもとに5月26~28日にかけてウップサーラとストックホルムで開かれる。20人ほどの講演者の参加が期待され、そのうちおよそ半数は外国から予定されている。

ロンドンリネー協会(Linnaean Society of London)の後援のもとに同種の会合が同時に準備されつつあり、スウェーデンにおける同会合は“二重シンポジウム”の一端を担うであろう。

カール・フォン・リネーは1707年スモーランド(Småland)の南スウェーデンの貧しい牧師館に生まれ、スウェーデンのあらゆる時代における最も著名な人物の一人である。彼の偉業は自然科学の系統立てで、その土台はいわゆる植物雌雄分類法と二名式の学名命名法である。(それによって動植物は総称と学名の二名を与えられる)。

リネーは多作家で数百冊の科学の著書を出版した。これらのうちで最も著名なものは、“自然の体系”(Systema Naturale)—1735年初版、2つ折り版12ページ;1766-68年に第12版、8つ折り版2,500ページ以上にわたると“植物の種”(Species-Plantarum)1753年である。前者は人類の発達に多大な意義をもたらす100冊の本のうちの1冊であると言われる。

1730年代にリネーは3年ほどオランダ、ドイツ、イギリス、フランスに滞在したが、ヨーロッパを離れたことはなかった。

彼は科学的な標本を集めるために商船や探検旅行に弟子を伴わせて世界中に派遣した。

彼らのうち幾人かは独力で世界的な著名人になった;ダニエル・ソランダー(Daniel Solander)はジェームズ・クック(James Cook)と共に太平洋を旅し、ペーテル・フォシュコール(Petter Forskåhl)はアラビアに、南アメリカにおけるペール・レーヴリング(Pehr Löfving)、北アメリカにおけるペール・カーム(Pehr Kalm)、“日本のリネー”と名付けられたC. P. ツューンベリイ(C. P. Thunberg)などである。

リネーは彼の科学著書の大部分をラテン語で書いたが、母国語の大家でもあった。彼のスウェーデンにおける旅に関する著書は18世紀のスウェーデンの散文の傑作のうちに入るといわれている。

# 職場組織の 改善と能率

日本大学教授

高須裕三

中央大学教授

丸尾直美 編著

トヨタ自動車工業(株)取締役

坪井珍彦

276頁 定価 1200円  
送料 160円

職場の再組織

労働環境をどう人間化するか  
ライン作業の再組織と改善  
コンベア作業の問題と改善の方向  
「マン・マシン」のあり方

日本における  
労働環境の特  
殊性と対策

自動車産業における労働の人間  
化—トヨタ自動車工業  
家庭電器産業における労働の人間  
化—松下電器、三洋電機、三  
菱電機  
自動車部品メーカーのモジュ  
ール方式—関東精器、日本ラヂエ  
ーター

海外企業の職場再  
組織の実態

「組織崩壊現象」に悩む企業  
作業再組織による画期的な新工  
場  
「生産グループ」「推進グルー  
プ」による職場の活性化  
ホワイトカラー労働にも人間化  
を  
「ジョブ・エンリッチメント」  
の成功例

頻発する山ネコ・スト、転職率とアブセンティズム（計画的欠勤）の著しい増加、組織の規律喪失ないしディスオーガナイゼーション（組織崩壊）現象の兆候など、先進諸国の工場および労使関係は重大な転換期に直面していると言えよう。

他方、こうした現象に対応する新しい自律的秩序の兆候も各国にみられはじめている。本書で詳細に紹介されているスウェーデンのボルボ社、サーブ・スカニア社、あるいはアメリカのゼネラル・フーズ・トベカ工場などは、作業の画期的な再組織と新方式の導入によって、現代の工場が抱えている問題を解決し、環境改善と能率の両立にめざましい成果をあげている先駆的工場の好例であろう。

日本の場合はどうであろうか。日本はヨーロッパや

アメリカとは事情が違い、日本人はもともと勤勉であるし、単一民族であるからコミュニケーションもうまくいっているし、人間的参加の組織もでき上がっている、と見る向きが多いようである。しかし人の意識というものは、契機さえあれば大変化し得るものである。オイル・ショックを契機とした消費者意識の変化で我々はそれを経験済みである。また、よごれる仕事を極端に嫌い、阻害意識の強い最近の若年労働者をつなぎ止めておくために、現場の管理者がどんなに頭を悩ましているかは、もっと知られるべきである。そういう意味で、本書に紹介されているトヨタ、松下電器などの日本の先駆的工場の努力は、大きな参考になるであろう。

〒 100 東京都千代田区霞が関1-4-2 電話 (03) 504-6515 振替東京 25976

ダイヤモンド社